

## 二升五号

### 主な活動内容

- 平成 27 年 4 月活動開始
- ・ 農家民泊、日本人観光客、インバウンド（訪日外国人）向けの空き家を活用したゲストハウスの運営
  - ・ 各種イベントの企画運営および空き家を活用したレンタルスペースの貸し出し
  - ・ 自らこだわりの米を生産、新たな販売方法の展開など



**大西正人さん**  
 財田町出身。進学のため上京し、東京でIT関係の制作会社を経営。平成26年から、東京都と三豊市の二拠点生活を開始する。

「都会の騒がしい中で働いていると、地元のゆったりとした雰囲気懐かしさを感じられ、戻りたいと思うようになりました。しかし、都会と同じ仕事を地元で探しても見つからず、帰郷する機会を失っていました。ただ、以前から、農業における後継者問題については関心があったので、そこにニーズがあるならば、自ら仕事を創っていかうと一念発起し、故郷の財田にも活動の拠点を設け、地域に根付いたサービスの模索を始めました」と大西さんは当時を振り返ります。

### きつかけは農業の後継者不足の解消

財田町にある「空き家を活用したゲストハウス&みんなのコミュニティスペース二升五号」。地域の活性化を目指し、平成27年4月に簡易宿泊施設（ゲストハウス）を始める。

「地域の人の交流の場として、もっと発展させたい」

# 二升五号

にしゅうごんごう

（右から）一般社団法人「誇」代表の浪越弘行さんと松賀屋家守の佐藤はなさん

特集

# 場所をつなぐ、人をつなぐ

今、三豊市に日本中、世界中から人が集まっている場所があります。それが財田町の二升五号と仁尾町の松賀屋。どちらも市民の皆さんが独自で展開している活動で、話題を作り、人を呼び、出会いを生む場所となっています。今回は、この2つの活動に焦点を当てて紹介します。

二升五号は会社名ではなく屋号。ますます繁盛の意味を持つ「二升五合」の言葉と、一号店、二号店と拠点が広がっていかばという願いを込めて「二升五号」に決めました。

二升五号が行う活動の一つに空き家を活用した簡易宿泊施設（ゲストハウス）があります。「ゲストハウスを始めると、二升五号は地域の農業者から『農業実習生の受け入れができる宿泊場所がほしい』という話を聞いたことでした。宿泊施設があれば、長期間の農業体験ができるようになり、農業の後継者不足の解消にもつながるのではないかと考えました」

が、予想に反して利用されたのが外国人観光客でした。「ゲストハウスは安くて面白い宿泊所を求める外国人には非常に人気があります。インターネットの宿泊サイトに登録したのも大きいと思いますね。おかげで、1年間で16カ国から延べ500人以上が訪れてくれました」

大西さんはSNSで呼びかけた仲間30人とともに、一軒の空き家を掃除し、平成27年4月にゲストハウスとしてオープンさせました。すると、さっそく就農希望者が、農業体験や研修に参加するために訪れる拠点となり、地域の農業者と就農希望者との交流も生まれました。

**海外から観光客が続々と**

当初は、就農希望者のゲストハウスとしてオープンしました



▲二升五号が気に入って再度訪れてくれる外国人観光客も増加中

### 移住希望者と地域をつなぐ

平成27年8月、三豊市に移住を希望している家族がいると紹介を受け、ゲストハウスに初めて移住希望者を受け入れることになりました。

「ゲストハウスを始めたときは、移住希望者のニーズがあるとは思わず、うれしい誤算でした」





「さまざまな世代が  
つながり、  
刺激しあう場に」

# 「誇」 一般社団法人

仁尾町にある築100年の古民家「松賀屋」の再生と、松賀屋を中心とした仁尾のまちの活性化に取り組み。平成28年5月、全国2例目となるシェアビレッジ仁尾の運営を始める。



▲一般社団法人「誇」のメンバーら

## 一般社団法人「誇」

平成26年2月に結成。25～41歳の若手経営者ら、11人のメンバーで活動している。

### 主な活動内容

- ・松賀屋の保存、修繕、活用、イベントの実施
- ・シェアビレッジ仁尾の運営
- ・レンタルスペース平石堂の運営

た。その後も少しずつ相談を受けることが増え、移住希望者と地域をつなぐ食事会などのイベントを企画し、移住希望者の移住前の不安や、移住後のイメージを膨らませる機会を作りまし。このイベントがきっかけで、市内に4人が移住し、さらに4人ほどが三豊市に移住をする」ということで準備中です」



▲「移住希望者とお食事会nanoda」は現在までに2回開催

### 米作りと寺子屋で交流

二升五号のイベントは、米作りのようにみんなで体験するものから、寺子屋と題して自主学習するものまで、内容も幅広くなっています。

「農業の後継者不足を解消するサービスを模索していく上で、自分自身も一生産者としての視点を持ち続けようと、米作りを始めました。地域の農業者から



▲収穫した二升五号米をみんなで食べるイベントも  
米をお土産に。日本らしさが感じられるパッケージデザイン▶

アドバイスをいただきながら、ゲストハウス利用者に農業体験をしてもらい、みんなで米作りを楽しんでいます」

また、寺子屋は、毎週水曜日の夜に1時間程度、みんなで一緒に勉強など好きなことに打ち込もうと始めました。

「今は、地元の中学生も参加しています。大人だけではなく、子どもも加わり、世代間交流も生まれています。こうした交流を通して、地元を好きになってもらい、地元のために何かしたい」という気持ちが生えてくれたらうれしいですね」

ここに来たら人がいる、そんな場所にしたい

「現在はイベントのほとんど

を一人で企画していますが、今後、イベントの企画者が増えてくるといいですね。二升五号の空き時間を利用して、異なる企画者が日替わりでイベントを行うなど、たくさんの方が訪れる場所になることが目標です。常に誰かがここにいて交流ができるというのが理想ですね」



岩井敦子さん(仁尾町)

## 二升五号のここが好き！

二升五号は一言で言うと、「誰でもおおらかに受け入れてくれる場所」です。ここに来ると居心地がよく、いつも親戚の家にいるような気分です。地元の人や旅行で訪れている人など、初対面の人と出会って刺激をもらうことも多いです。



図子浩さん(財田町)

二升五号の活動で、地域の良さを再認識できたことがたくさんあります。だからこそ、地域の人だけでなく、市内・市外からも自然と人が集まってくるのですね。私自身も頻りに顔を出し、地域だけでなく、世代を超えた交流をする機会が増えました。外国人ゲストともドキドキしながら交流していますよ。



上野秀一さん・綾子さん夫妻(仁尾町)

平成28年3月に東京都から三豊市に移住してきました。市内で移住先を探しているときに、二升五号のゲストハウスを2回利用しました。移住してからも、田起こしや田植え、稲刈りのイベントに参加し、子どもたちと一緒に自然とのふれあいを楽しんでいます。こうしたイベントを通して、同世代の家族とも仲良くなることができました。

### 松賀屋を観光拠点に

かつて塩業により栄え、仁尾発展の礎を築いた塩田忠左衛門。その邸宅は、屋号「松賀屋」と呼ばれ、明治時代の面影を今に伝えてきました。しかし、この歴史ある松賀屋も、空き家となりました。約40年という歳月が経っていました。そうしたなか、平成24年12月、松賀屋を再生し、観光の拠点を築きたいと、地域住民を中心とした「仁尾まちなみ創造協議会」が設立されます。さらに、その協議会のメンバー5人が平成26年2月、一般社団法人「誇」を立ち上げ、この松賀屋を購入し、管理を始めました。

### シェアビレッジという選択

「誇」の代表の浪越弘行さんは、「仁尾町を訪れた人に、もっとゆとりとした時間を過ごしてもらいたい。そのため宿があれば」と「誇」を立ち上げた当時を振り返ります。しかし、松賀屋を宿として運営するには旅館業の認可を受ける必要があります。そのため、建物の改修に伴う膨大な資金が必要となり

ます。そこで浪越さんが目を付けたのが、新聞記事で見つけた「シェアビレッジ」のプロジェクトでした。

「『シェアビレッジ』は、日本を一つの村に見立て、古民家の再生に賛同する人たち(村民金)を集めるプロジェクトです。この方法を使えば、古民家好きな人、古民家を残したいという考えを持つ人たちに松賀屋に来てもらえるのではないかと思います」

### シェアビレッジ仁尾、開村

シェアビレッジを初めて導入した秋田県五城目町では、古民家の修繕・活用に成功しています。それを受けて、松賀屋も改修資金を集めるために、シェアビレッジに参画します。

「松賀屋の修繕には、少なくとも300万円が必要でした。まずはこの金額を目標に募集を開始し、強い情報発信力を持つフェイスブックを使い出資者を募りました。すると、全国各地からこの活動に共感する人が現れ、当初の目標を超える350万円が集まりました」

### 松賀屋 家守の声

大学卒業後、東京で働いていたときに、シェアビレッジのことを知りました。興味を持ち始めていた矢先「松賀屋で家守をしてみないか」というお誘いを同じ時期に別々の人からいただいたんです。もうこれは強いご縁があるな、と思いました。「わくわくする方を選んでみたら」という友人の言葉にも後押しされ、仁

#### 松賀屋の家守になったきっかけ

松賀屋には、平成28年6月から住み込みで宿泊業務などを担う「家守」の女性がいます。それが高松市出身の佐藤はなさん。いつも笑顔で出て迎えてくれる佐藤さんは、看板娘として地域の人やお客さんに「はなちゃん」と親しまれています。今回は家守の「はなちゃん」にも松賀屋のお話を聞きました。



松賀屋の中は見学(有料)もできますのでどうぞ遊びに来て下さい

松賀屋家守 佐藤はなさん

尾に来ることを決意しました。東京から三豊市へ。松賀屋に住んでみて 仁尾町に移住して7カ月ですが、三豊の印象は「熱い！」という一言に尽きます。松賀屋に在ると、全国から刺激的な人々が訪れてくれますし、地元の人との輪もどんどん広がっています。ここに在ると、会いたい人に会えるんです。毎日が充実していて、松賀屋に居られることの良さを実感しています。

この資金を元に、平成28年5月、全国2例目となる「シェアビレッジ仁尾」が松賀屋を拠点に開村されます。



▲平成28年5月、シェアビレッジを考案した村長の武田昌大さんが東京から訪れ、開村宣言

#### 「寄合」で人をつなぐ

シェアビレッジの村民は、県内に111人、国内には2,000人以上います(平成28年12月7日現在)。村民は、全国にあるシェアビレッジに宿泊することが出来ます。また、誰でも参加できる寄合という名の交流会は、村民と地域の人の出会いの場となっています。「村民になるのがゴールではなく、松賀屋に来て、一緒に守っていくことを楽しんでもらいたいと思います。寄合は2カ月



▲寄合は、毎回テーマが変わります。第3回は炎。参加者は、食事や会話を楽します(撮影:藤岡 優)

に一度開催していますが、地域の人と訪れた人をつなぐことで、さまざまな世代が刺激し、学び合う場になることを期待しています

#### 仁尾の文化を残したい

平成28年9月からは、松賀屋を会場に地域の皆さんと一緒に盆踊りの練習を始めました。「次の夏には、松賀屋の広場で大人も子どもも楽しめる盆踊り大会をしたいと企画中です。地域の中に残っている、八朔人形まつり、雨乞いの竜まつり、盆踊りは継承していきたい文化です。これらの文化を守ってきた高齢者世代と孫世代の交流を通して、子どもたちに仁尾

の文化に興味を持ってほしいと思っています。また、地域の先輩方から知恵を学んでもらえれば。全国の村民の皆さんにも参加してもらえたら、仁尾の文化が日本中に広がるかもしれません」

#### 松賀屋は楽しみながら学ぶ場所

松賀屋を一言で言えば、「わくわくする個性が集まる場」と浪越さんは言います。「さまざまなイベントを企画していますが、これらは歴史や文化を学ぶことを軸に企画しています。最近では、20、30代を対象に、三豊の資金を考える会を定期的に行っています。この場に来て話し合っていると、勉強しているつもりがなくても、楽しみながらいつの間にか学んでいる。そんなゆるさの中の真面目さを大切にしています。このイベントを發展させて、松賀屋をいろいろな世代をつなぐ場にしていきたいですね」

仁尾の誇れる文化や歴史を継承しながら、地域の發展に向けて、一般社団法人「誇」はこれからも活動を続けていきます。

#### 松賀屋のここが好き!



仁尾まちあるきボランティアガイド 河田典子さん

最近まで、松賀屋は地域でも別格の存在で、誰も中を見ることはできませんでした。誇の活動のおかげで、今では一般の人にも開放されています。また、まちあるきのお客さんも松賀屋の重厚な家構えと、歴史ロマンに一段と目が輝きます。それを見て、私もうれしさが込み上げてきます。

シェアビレッジが始まる前、「宿泊する部屋をみんなで掃除しよう」という活動がありました。そこに参加して、松賀屋を作り上げる過程に関わった気持ちになり、愛着が生まれました。それから今もたびたび遊びに行っています。松賀屋でしか味わえない活動や時間がありますね。



上田崇さん・恵美さん夫妻 (詫間町)

## 「みとよ」っておもしろい!

#### 楽しい場所に人が集まる

「最近、みとよっておもしろい場所が増えてきたよね」  
これは二升五号と松賀屋のイベントに両方参加した女性の声です。この言葉が表すように、二升五号と松賀屋は、「楽しい!」を共通点に人が人を呼び、にぎわう場所となっています。二



#### 活発な市民力がまち発展の原動力

これらの市民力の活動は、「地元を盛り上げたい」「地域の良さを伝えたい」という想いを自分たちの力で形にした結果です。市はこうした市民の皆さんによる活発な取り組みが、まちを元気にする主戦力だと考えています。今後も二升五号と誇のような市民力による活動を市は応援していきます。